

FEBRUARY

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
						01
02 10:30 KIDS SANGA 11:00 SHOTSUKI (E) 13:00 SHOTSUKI (J) JSBTC AGM FUNDRAISER PIE SALL	03 PAINT 10:00 KARAOKE	04 PAINT 20:00 MINYO TEACHER'S WORKSHOP	05 PAINT	06 PAINT 10:00 TAI CHI	07	08
09 10:30 KIDS SANGA 11:00 REGULAR 13:00 SANGHA MTNG 14:00 LEGACY ESTATE PRESENTATION	10 10:00 KARAOKE	11	12	13 10:00 TAI CHI	14 10:00 JAPANESE FTF EVENT	15
16 10:30 KIDS SANGA 11:00 NEHANYE SANGHA DAY LUNCHEON	17 OFFICE CLOSED	18	19	20 10:00 TAI CHI 10:00 MOMIJI CONGREGATION 13:30 BUYO	21 19:00 BUYO	22
23 10:30 KIDS SANGA 11:00 REGULAR	24 10:00 KARAOKE	25	26	27 10:00 TAI CHI 13:30 BUYO	28 19:00 BUYO	

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時：二月二日（日）（英語：午前十一時から）

（日本語：午後一時から）

場所：トロント本願寺

※英語法要のみZoom配信をさせていただきま
す。

Zoomでの参拝を希望される方は、その旨を

<the@the.on.ca>までお知らせください。

寺院事務所からZoom Linkを送らせていた
きます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さ
い。

なお、四月より日本語の祥月法
要の時間が変更となります。英
語法要の前の時間に行う予定で
すので、詳しくは、来月号の
ニュースレターをご確認ください
い。



涅槃会法要のお知らせ

日時：二月十六日（日）（午前十一時から）

二月十五日は、お釈迦さまがご入滅された日
として知られています。この日を「涅槃会（ね
はんえ）」と呼び、仏教徒が集い、釈尊のご生
涯とその教えを偲ぶ大切な法要を行います。

お釈迦さまは約二五〇〇年前、インドで生ま
れ、数多くの人々に教えを説きました。その教
えの核心は、私たちが生きるこの世界の無常や
苦しみを直視し、そこから解放される道を示す
ものでした。そして、八十歳の生涯を終え、沙
羅双樹のもとで安らかに涅槃へと入られまし
た。

私たち浄土真宗の門信徒（メンバー）にとつ
て、涅槃会はただお釈迦さまを偲ぶだけではあ
りません。釈尊の教えを通して、私たちは阿弥
陀仏のおはたらきに気づかされるのです。ご一
緒にお聴聞させてもらいましょう。

サンガ主催の昼食会のお知らせ

日時：二月十六日（日）

涅槃会礼拝後の無料ランチにご参加くださ
い。通常メニューとビーガンメニューの両方を
ご用意しております。

サンガ・ボランティア・グループは毎年、サ
ンガ・デー、花まつりファミリー・パンケッ
ト、パンケーキ・ランチ、餅つきなどのイベン
トを開催しています。また、当寺院のビデオ放
送サービスなどのプロジェクトも行っていま
す。

私たちの目的は、当寺院の歴史に敬意を表
し、家族と一緒に時間を過ごすことができ、家
族が当寺院に通うのに魅力的となるようなイベ
ントを主催し、プロジェクトを後援すること
です。

寺院会費について

年度が変わりましたため、寺院会員の登録を
お願いしています。詳細は英語のニュースレ
ターをお読みいただければと思います。

あらゆる経費が増加する中で今年度の会費と
ニュースレターの購読料の値上げを見送ること
はできないと考えています。皆様にはご理解い
ただき、み教えを広め続けることができるよう
引き続きの寺院活動への支援とご協力をお願い
申し上げます。

リンシロおじさんの後を子犬のようについて回り、二年間過ごした後、ようやく一人で魚釣りをする自信ができました。私は漁師だったのです！

二十五歳か二十六歳のとき、母イネは森さんを通じて、その家の次女であるキモト・メアリ・ミキとの結婚のための白羽の矢を立てた。

私たちはトフィーノの学校に通っていたところから知り合いました。オフシーズンにはダンスパーティーで会いました。彼女はとても明るく元気いっぱいだったので、私は彼女が好きでした。そして、彼女は私の妻になりました。私たちは一九三九年に小さな木造の英国国教会で結婚しました。

その頃、鮭の値段も上がり始めました。ヨーロッパでの戦争で、魚や鮭をはじめ、あらゆる食料品の需要が高まっていました。BCパックはトフィーノで唯一の魚の買い手でしたが、私たちのサーモンの需要が高まるにつれて、彼らは私たちと追加のお金を分けることを拒否しました。私たちは、他のグループと同じように、独自の協同組合を結成しました。私たち一人一人が、当時としては大金だった数百ドルを協同組合に前払いしなければなりませんでした。協同組合員の平均年収は四千ドルで、当時としては巨額でした。メアリと私には二人の幼い息子がいて、生活はとても順調に思えました。母のイネは健康で、子供たちの世話や庭の手入れを手伝ってくれました。

一九四一年十二月七日、すべてが変わりました。日本が真珠湾を攻撃し、私たちの無限の可能性はすべて、ニュース速報、噂、当てつけの嵐に飲み込まれました。日本が米国に宣戦布告したため、私たちの平穏な小さな世界はひっくり返されました。私たち日系カナダ人は、この二つの国の間の争いに巻き込まれ、私たちが知っていた世界が永遠に消え去る中、無力だったと確信しています。

一九四二年の二月か三月頃、小さな水上飛行機がトフィーノ港に着陸しました。私たちは飛行機に会いに行きました。それから、私たちは命令を聞きました。荷物をまとめて避難するまでに十二時間あります。私たちはそんなことはできないと言いました。彼らは最終的に折れて、私たちに二十四時間の猶予を与えてくれました。それが私たちが必需品を集めるのに与えられた唯一の時間でした。私たちは帰れると思っていました。でもそれは決して起こりませんでした。」

それが私の父の言葉でした。

このように、幸福と不幸に満ちた人生の二つのエピソード。これらのエピソードの中で、私たちは無常、絶え間ない変化、浄土真宗の仏教徒として私たちには馴染みのある言葉の例を聞きました。

私はこれらすべてをどう結びつけるかを考えました。

私にとって、このとき、最良の方法は浄土への

旅を暗唱することだと思えます。この歌は牧野先生から教えられたものです。先生は私たちに頭で聞くのではなく、心で聞くように教えてくれました。歌詞は次の通りです。

鐘の音となりて

すべての命が無常であることを知らせる響き。

儂き人生という長い夢から目覚め、

合掌する胸の内に、

常住の仏の声が響く。

雨の日も嵐の日も、何を憂うことがあろうか。

深い業の重みに涙することがあれど、

心の奥底から湧き上がる喜びがある。

その喜びが、微笑む力を与えてくれる。

合掌 南無阿弥陀仏

トロント本願寺 ミニスターアシスタント

デニス・マドコロ

日本語訳 橋本

駐在僧侶着任のお知らせ

十月の祥月法要のゲストスピーカーとしてトロントに来てくれた杉浦輝（すぎうらひか）先生が今年の四月より、私と一緒にトロント本願寺の駐在僧侶として働いてくれることが決まりました。

幸せと不幸せ



幸福とその反対である不幸について、二つの話をしたいと思いません。

これらは私の父、

ジョン・ヨシオ・マド

コロに関するものです。これらは私が二〇〇六年に書いた短編小説からの抜粋です。この小説は「日系イメーজ」に掲載され、これはブリテイッシュコロンビア州バーナビーにある日系カナダ人博物館の月刊ニュースレターです。私は父の声で話せると信じていたので、一人称で書きました。

では、始めに一九二四年にタイムスリップします。当時、私たちはバンクーバー島の西海岸にある人里離れた漁村、トフィーノにいました。太平洋は西に日本まで広がっていました。

これは私の父の言葉です。

「私にとって人生はかなり良かった。父は優秀な漁師だったので、大恐慌のときでさえ、食卓には常に食べ物があつた。今思えば、私たちは都会の人々よりもうまくやっていたと思う。裕福だったと言っているわけではありませんが、比較的うまくやっていました。私たちは陸や海の幸を食べ、おいしいものを食べました。アーミテージ湾でハマグリを掘り、海苔は豊富でした。カニやアワビはどこにもありませんでした。

私が十一歳のとき、父は私をバンクーバー島の東海岸にあるカンバーランドに送ることに決めました。父は私に日本語を学ばせたかったのです。トフィーノにいる間、私は主に英語を話していました。父は私が日本語を失っていると思ったのでしよう。私は雑誌を読んだり、かなり上手に書くこともできたので、日本語はかなり上手だと思っていました。ハロルド・キモトと私はその年にカンバーランドに送られました。

トフィーノに戻るのはいつも慣れる必要がありました。カンバーランドの活気に比べると、トフィーノは小さな漁村でした。カンバーランドの日本人家族は数百人いました。炭鉱と木材産業が、独立した日本語学校と劇場がある活気あるコミュニティを支えていました。劇場には日本からのツアーアーティストが訪れていました。そう、当時は活気のある活動の中心地でした。それは、石炭や木材などあらゆる商品の価格が最低になった不況の前のことでした。漁師にとって良い時代でした。

父は健康な人でした。魚を釣りたいなら、健康でなければなりません。トフィーノでは、鮭を釣るのは主に日本人でした。白人は引き網漁に興味がありました。

秋と冬には、ハロルド・キモトと一緒にカンバーランドに行き、そこで通常の英語学校で勉強し、その後は毎日日本人学校に通いました。私たちはとても忙しくしていたので、いたずらをする暇がありませんでした。

一九二八年一月のある日、すべてが変わりました。父が亡くなったのです。

ロイストン出身の叔父、エザキがカンバーランドに来たのを覚えています。彼は私に荷物をまとめて、葬儀が行われるステイブストンまで一緒に行くように言いました。

トフィーノの家には父はいませんでした。母のイネが私に家族の面倒を見るように頼みました。私は何と言えればいいでしょうか。私は十四歳でした。最善を尽くすと言いました。

父の兄であるリンシロウが私を引き取り、漁のコツを教えてくださいました。私は毎朝父の船に乗って彼について行き、漁場を案内してもらいました。以前は大変だと思っていました。今回はもつと大変で、私にとっては恐ろしいことでした。船が座礁したらどうしよう？ 船から落ちたらどうしよう？ 魚が釣れなくて家族が飢えてしまったらどうしよう？ ああ、私は心配性の二歳の少年でしたが、漁の日はとても疲れていた。夜はよく眠れました。

まあ、船は座礁せず、船から落ちることもなく、魚も何匹か釣れました。叔父の支えと励ましのおかげで、なんとかやり遂げることができました。私は自分のことを誇りに思いました！ 父が何らかの形でそこにいたら、私が大きな鮭を釣っているのを見てとても喜んでくれただろうと思いました。初期の頃は数匹を失いましたが、家族は無事だったと喜んで言えます。それで十分でした。

四頁に続く

もし私たちが自分の人生をそのまま思い通りに進めることができたなら、それは素晴らしいことかもしれません。誰もが自分の人生で不幸な出来事に遭遇することを望んでいません。

しかしお釈迦さまが、「人生は苦なり」と説かれていきますように、生きることは、さまざまな苦難に直面し、思い通りにはいきません。そしてその苦しみは、たとえ仏さまや神さまといった存在に熱心に祈ってもなくなるものではありません。自らがその苦しみを引き受けなければならぬのです。

私たち浄土真宗の教えは、「阿弥陀さまの願いを聞く教え」です。阿弥陀さまは、私が悩み苦しんでいる存在であると、常にその手を差し伸べ、私を助けようとしてくださっています。

しかし、阿弥陀さまは、私たちに過度な修行や苦行を強いることはありません。たとえば、断食や滝に打たれるようなことは求めません。そのままでもいい、そのままがいいから私の願いに気付いておくれと阿弥陀さまの方からはたらきかけてくださっているのです。

親鸞聖人は『正像末和讃』において次のようにお示しく下さいました。

如来の作願をたづぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

註釈版聖典六〇六頁

阿弥陀さまは、私が悩み、苦しみ、不安の中にあっても、決して見捨てることなく、私に仏の功德を与え、南無阿弥陀仏というお名号で私の苦悩を解き放とうとしてくださっているのだ

と教えてくださいます。

阿弥陀さまの私たちの苦悩を解消しようという願いは「南無阿弥陀仏」という声の仏となつて、私たちに届いてくださっています。

どこでも、誰でも、いつでもお称えやすいように、南無阿弥陀仏というお名号となつて、すでに私たちに寄り添ってくださっているのです。

しかし、念仏を称えたからといって、すぐに病気が治つたり、事故に遭わなかったりするわけではありません。阿弥陀さまは私に、「あなたの喜びは私の喜びであり、あなたの苦しみは私の苦しみだ。あなたの悲しみも共に背負い、共に悲しむからな。」と、いつも寄り添ってくださっているのです。

この教えを聞かせていただく私たちにとつて、都合の良い、悪い出来事に問わず、そのことを感謝することが大切であることがわかります。

なぜなら、都合の悪い出来事の中でも、阿弥陀さまと共にそれを乗り越えることができ、阿弥陀さまの深い慈悲をより一層感じることができるところからです。そのような出来事が、私たちを成長させ、阿弥陀さまの教えを味わうための貴重なご縁となるのです。

教えを聞く場は、お寺に参る時だけではありません。私たちの日常生活そのものが、阿弥陀さまの願いをいただく場所です。もちろん私にとつてはカーリング場も阿弥陀仏の大悲に抱かれていますという安心をいただく場所なのであります。

南無阿弥陀仏

トロント本願寺 駐在僧侶 橋本顕正

枕経について

ご家族の枕経を検討されている場合は、事前に当寺院の事務所へご連絡いただくようお願いしております。

ご希望の時間を調整し、亡くなられる前であれば、ご一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤めを、亡くなられた後であれば、故人を偲びながら、ご家族の皆さんと仏徳讃嘆のお勤めをさせていただきます。

当寺院に事前にご連絡いただくことによつて、ご家族の質問への対応や必要な情報を提供することが可能となります。

枕経についての連絡、質問については、
(416) 534-4302

あるいは、thc@thc.on.ca まじりに連絡いただくようお願いいたします。

留守の場合はメッセージを残していただき、担当者が折り返し対応させていただきます。

トロント本願寺 理事会

年次総会延期のお知らせ

二〇二五年一月二十六日に予定していましたがトロント本願寺の年次総会は延期となりました。現在日程を調整中です。

トロント本願寺 理事会

佛心

日々の生活で仏教を聞く

寒い日々が続きますね。トロントでの冬は初めての経験ですが、カナダの冬は二〇二二年に英語留学していた時に経験しているものでこれで二回目となります。



マイナス十度よりも寒くなると、外に出るのが億劫になるなど感じます。そんな中、年末の除夜の鐘や元旦の法要にはそれぞれ約百人ずつの人々が集まってくれました。

そのほとんどがお寺に来られたことがない方々でした。やはり年末年始にはお寺に行きたいという気持ちになるのが日本人の文化なのかもしれません。

トロントには新移民の方が沢山住まわれているかと思えます。一月からは新移民の団体にイベントのためにお寺のソーシャルホールを貸し出すなどのアプローチを行なうようになって、少しずつですが、お寺を知っていただけられるようになっていくなればいいのかと思っています。そういった方々に年間を通して一度でも多くお寺に足を運んでいただける機会を作って、阿弥陀さまのお話を一緒に聞かせていただきたいと思います。

さて、話は変わりますが、十二月の中旬にアメリカの研修を終えトロントに帰ってきてからは毎週日曜日の夜に「NISEI CURLING CLUB」に

二〇二五年二月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

てカーリングを楽しんでおります。

皆さんご存じかとは思いますが、カーリングは、氷上で行われる戦略的な冬季スポーツで、場面に応じた判断

が求められることから「氷上のチェス」とも呼ばれています。四人ずつの二チームが、磨かれたストーンを「ハウス」と呼ばれる円形のターゲットエリアに向かって滑らせます。

日本では女子の代表がオリンピックでメダルを獲得するなど知名度自体は上がってきていますが、カーリング専用の競技場は日本全体で十数か所しかなく、始めるには大変難易度が高い競技です。一方でカナダは競技人口が七十万人を超え、世界のカーリング人口の約七割がカナダ人といわれるほどのカーリング大国であります。

私もカムループスでの留学中にカーリングに初めて挑戦し、すっかりその魅力に引き込まれました。当時は平日に二回、二時間ほど練習をし、日曜の夜にカムループスの日系のリーグに参加、最後にはブリティッシュコロニア州の日系の大会にも参加させてもらったほどです。

現在参加している「NISEI CURLING CLUB」には、ほとんどお寺のメンバーはいませんが、それでも皆さんとてもフレンドリーに接してくれて、ゲームが終われば敵味方関係なくテーブルを囲んで交流を深めます。

カーリングの魅力は対戦相手へのリスペクトがあることです。試合の最初と最後には互いに握手し「Good Curl」や「Good Game」と挨拶します。そして審判を必要とせず、相手がミス

してもそれを喜ぶことはありません。物凄くプレーをしていて気持ちのいいスポーツです。

また、カーリングは仲間と力を合わせて戦うスポーツです。一人のプレイヤーが石を投げたとしても、仲間のスウィーパーがなければ、石は思った通りの場所に届きません。

しかし、どれだけ練習をしても、またただけ仲間と息を合わせても、石が必ず思い通りの場所に止まるとは限りません。むしろ思い通りに行くことの方が稀です。いくら同じフォームで同じ強さで石を投げられたとしても試合の序盤と終盤では氷の状態が常に変化しその曲がりやスピードにも大きな変化が出てきます。微妙な力加減、予期せぬ出来事によっても結果が左右されます。だからこそ、カーリングの醍醐味は「全てをコントロールできない」というところにあるのかもしれない。

「全てをコントロールできない」という面では私たちの人生そのものもカーリングと同じなのかもしれません。どれだけ準備をしても、計画通りにいかないことがしばしばあります。私たちは普段、漠然と「自分の人生は自分の思い通りに進むべきだ」と信じていることが多いです。そのため、思い通りにならない出来事や困難が起きると、「どうしてこんなことが…」「何かおかしい」と感じる場合があります。そして、その原因を自分の内面ではなく、他者や外部のものに求めがちです。「あの人のせいだ：」「あれのせいだ：」などと、責任を押し付けてしまうのです。

二頁に続く